11「春の」 ─中世の日記

20年度　京都女子大学

★　次の文章は、作者のが関東下向を間近に控えた時のことを記したものである。読んで、後の問いに答えよ。

　十一日、下るも幾程なければ、１いとど名残も多くて、暮るる程にｉ東宮に参り１ぬ。にあり。いかに思ふらむなどａ打ち湿りおはしまし、常灯も  
１参らず、月２御覧ぜられておはします。１大方にだにこぼれやすき涙の、Ａいかでかかかる御気色につれなからむや。いひ知ら２ぬ袖の上①なり。月をだに宿して見むには、２げに濡るる光にてもあらまし。「といふ新院の北面、名残とて３まうで来たり」と申せば、ただ今でむもいと口惜し、Ｂ又出でざらむも人のためなかるべし。とばかりありて、ちとこの由をｂ申して、２やがて帰り参らむとて、を申して３相具して出で３ぬ。杯る程なく又参りぬ。又出でさせ４給ひて、は名残なれば、４とのごもることあらじとて、月をのみ眺め５おはします。御前に、、頼成ばかり②なり。（中略）け夜けて、月入り方に③なり４ぬ。御物語ども優にて、人々思はぬ涙も、５折からにや、しぼるばかりなり。御ｃ召し出だされて、き合はせばかり、忍びやか④なり。信有感に堪へず、折に合ふ朗詠・ⅱ今様しつつ、情多し。頼成笛とり出でて吹く。持たずして口惜しがれど、なし。時々ｄし、吹く。（中略）

　今宵の仕儀、３なかなか何と記し置きがたし。よろしき事こそ筆にいひなすこともはべれ、これは言の葉も心も及び　　甲　　ば、昔のⅲ紫式部ならでは、ただの人の心地及び　　乙　　むかし。ただ打ちめて心にいひ合はせて、行末も思ひ出でむかし。明けてぞ出でぬる。

　十三日、暁はち６はべらむとて、かつはの御前の仕儀も、今一度参りてｅかしこまり申さむとて、夕かけて参りたれば、鎌倉より人上りて、住み慣れし、むなしき空のと⑤なりぬる由告ぐ。大方残る家すくなく焼けはべる由  
ｆ申せば、下りてもいづくにいかにと思ひやる方なければ、暁は延び５ぬ。まづ人を下して、しばしばかりの立ち入り所尋ねはべるとて、Ｃ明後日とて延びぬ。

注１　上北面＝院の御所の北面に詰め、院中の警備にあたった北面の武士のうち、四位または五位の者。

注２　笙＝雅楽に用いる管楽器の一つ。笙の笛。

注３　皮笛＝口笛のこと。

問１　―線部①～⑤の「なり」の中で、断定の助動詞「なり」はいくつあるか。次のア～オの中から一つ選べ。

　　ア　無し　　イ　一つ　　ウ　二つ　　エ　三つ　　オ　四つ

問２　　甲　・　乙　には、それぞれ形容詞型の活用をする接尾語「がたし」が入る。それぞれ　甲　・　乙　に入れるのに適切な形に活用させ、解答欄に記入せよ。

　　甲＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

　　乙＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

問３　＝線部ⅰ「東宮」、ⅱ「今様」について、それぞれひらがな（現代仮名遣い）で読み方を記せ。

　　ⅰ＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

　　ⅱ＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

問４　―線部１「大方にだに」、２「げに」、３「相具して」、４「御とのごもる」、５「折からにや」の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ選べ。

１　「大方にだに」

　ア　おそらくは　　イ　一般人であれば

　ウ　普通でも　　　エ　めったにないことだが

　オ　一通りでなく

２　「げに」

　ア　なんとなく　　　イ　本当に　　ウ　不思議と

　エ　あからさまに　　オ　なぜか

３　「相具して」

　ア　申し合わせて　　イ　準備して　　ウ　一緒に

　エ　話し込んで　　　オ　親しく

４　「御とのごもる」

　ア　お休みになる　　イ　お亡くなりになる

　ウ　お別れになる　　エ　お泣きになる

　オ　お見送りになる

５　「折からにや」

　ア　時節にふさわしく　　　イ　時間が遅いので

　ウ　季節がめぐってきて　　エ　時期が来たのを見計らって

　オ　時が時だからだろうか

問５　―線部ａ～ｆの主語は誰か。最も適当なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ（同じ記号を何度選んでもかまわない）。

　　ア　作者　　イ　東宮　　ウ　仲頼　　エ　顕範　　オ　鎌倉の人

　　ａ＝〔　　　〕　　ｂ＝〔　　　〕　　ｃ＝〔　　　〕　　ｄ＝〔　　　〕

　　ｅ＝〔　　　〕　　ｆ＝〔　　　〕

問６　⌇⌇線部Ａ「いかでかかかる御気色につれなからむや」の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　どうしても関係が無い素振りをして、泣かずにいなくてはならないのだろうか。

イ　名残惜しげなご様子に、どうして涙せずに平気でいられようか。

ウ　素知らぬ振りをして、なんとかやりすごせないだろうか。

エ　なぜ涙も流さず、よそよそしい表情をしていらっしゃるのだろうか。

オ　私の様子に関心が無いようなご様子を、冷淡に感じずにいられようか。

◎問７　⌇⌇線部Ｂ「又出でざらむも人のため情なかるべし」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　京都で別れを惜しんでくれる東宮や仲頼のために、今さら関東へ下向することを取りやめるのも、関東で待っている人に対して失礼になるということ。

イ　これ以上東宮御所にとどまって別れを惜しんでいるのも、かえって別れの悲しみをかき立てることになるので、東宮に対して思いやりを欠くことになるということ。

ウ　夜になってしまったのに、退出して恋人のもとを訪れて別れを惜しまないのも、情趣に欠けた行動になってしまうということ。

エ　せっかく仲頼が別れを惜しみに来てくれたのに、それに応えずに東宮の御前にいるままだと、仲頼に対して薄情になるということ。

オ　今退出しないと、伝言を伝えに来た女房を無視することになるので、女房がいたたまれなくなってしまうのがかわいそうであるということ。

問８　⌇⌇線部Ｃ「明後日とて延びぬ」とあるが、出発が明後日まで延期されたのはなぜか。次のア～オの中から最も適当なものを一つ選べ。

ア　鎌倉に行く前にもう一度訪れてくるようにと、東宮から伝言があったから。

イ　鎌倉では戦乱が起こっており、安心して滞在できなさそうだという情報を得たから。

ウ　鎌倉からの急な来客があって、出発することができなくなってしまったから。

エ　鎌倉で世話になるはずだった昔なじみが亡くなってしまい、頼れる人がいなくなってしまったから。

オ　鎌倉で住んでいた家の辺りが焼けてしまい、滞在するところが無くなってしまったから。

問９　＝線部ⅲ「紫式部」は『源氏物語』を著した人物である。『源氏物語』より後に成立した作品を、次のア～オの中から一つ選べ。

　　ア　古今和歌集　　イ　更級日記　　ウ　宇津保物語

　　エ　蜻蛉日記　　　オ　伊勢物語

【確認問題】

１　二重傍線部１～５の助動詞「ぬ」の中で、一つだけ他とは違うものがある。その記号と文法的意味を答えよ。

　記号　　　　〔　　　〕

　文法的意味　（　　　　　　）

２　□１～６の敬語の種類を、それぞれ次から選べ。

　ア　尊敬語　　イ　謙譲語　　ウ　丁寧語

　１〔　　　〕　２〔　　　〕　３〔　　　〕

　４〔　　　〕　５〔　　　〕　６〔　　　〕

３　波線部１～３の意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

　１　いとど

　　ア　たいそう　　イ　まったく

　　ウ　いっそう　　エ　いつもより

　２　やがて

　　ア　そのまま　　イ　そのうち

　　ウ　すぐに　　　エ　ゆっくり

　３　なかなか

　　ア　かえって　　　イ　とても

　　ウ　どうしても　　エ　むやみに

【補充問題】

４　点線部「月をだに宿して見むには、げに濡るる光にてもあらまし」について、以下の説明文の空欄１～５に入る語句を、後の語群からそれぞれ選んで答えよ。なお、同じ記号を何度用いてもよい。

　副助詞「だに」の主な用法には、［ １ ］（～さえ）と［ ２ ］（せめて～だけでも）とがある。後者は、願望・意志・命令・仮定などの表現とともに使われる。点線部の場合、下に「見むには…あらまし」という表現が続く。助動詞「まし」の意味が［ ３ ］ということを考えると、その上には条件節（～ならば）がくるはずだから、助動詞「む」の意味は［ ４ ］ということになる。したがって、ここでの「だに」は［ ５ ］の用法だと判断できる。

　ア　反実仮想　　イ　最小限の限定

　ウ　仮定　　エ　推量　　オ　類推

　カ　添加　　キ　意志

１〔　　　〕　２〔　　　〕　３〔　　　〕

４〔　　　〕　５〔　　　〕

【解答】

問１　ウ

問２　甲＝がたけれ　乙＝がたから

問３　ⅰ＝とうぐう　ⅱ＝いまよう

問４　１＝ウ　２＝イ　３＝ウ　４＝ア　５＝オ

問５　ａ＝イ　ｂ＝ア　ｃ＝イ　ｄ＝エ　ｅ＝ア　ｆ＝オ

問６　イ

問７　エ

問８　オ

問９　イ

【確認問題】

１　記号＝２　文法的意味＝打消

２　１＝イ　２＝ア　３＝イ　４＝ア　５＝ア　６＝ウ

３　１＝ウ　２＝ウ　３＝ア

【補充問題】

４　１＝オ　２＝イ　３＝ア　４＝ウ　５＝イ

【現代語訳】

　十一日、関東下向（に出発する日）までどれほどの日数もないので、いっそう名残惜しさもまさって、日の暮れる頃に東宮御所に参上した。（東宮は）の間にお出ましになる。（私が出立した後は、その寂しさによってご自身が）どのように思うであろうかなど（と思って）涙にしおれていらっしゃり、（家来は、東宮の意向により）普段の灯火もつけ申し上げず、（東宮は）月をご覧になっていらっしゃる。普通でもこぼれがちな（私の）涙が、どうしてこのような（東宮の名残惜しげな）ご様子に、（涙せずに）平気でいられようか、いやいられるはずがない。言いようもない（ほどに涙に濡れる）袖の上である。（その袖に）月だけでも宿して見たならば、本当に（古歌にいうように）濡れる（ように輝く）月光であっただろうに。「仲頼という亀山院の上北面の武士が、別れ（を言うために）といって参上している」と（使いの者が）申すので、（悲しみに沈む東宮を残して）今すぐ退出するとしたらたいそう心残りだ、また、退出しないとしたら仲頼に対して薄情であろう。（と考えて）しばらくいて、ちょっとこのことを（東宮に）申し上げて、すぐ帰参しようといって、頼成を申し受けて一緒に退出した。（仲頼の挨拶を受け終わって）盃が一巡する間もなく、また御所に参上した。（東宮は）またお出ましになって、今夜はお別れだから、お休みになることはするまいといって、月ばかり眺めていらっしゃる。御前には、顕範、信有、頼成だけである。［中略］夜が更けて、月も入る頃になった。さまざまなお話も風情があって、人々が思わず流す涙も、時が時だからだろうか、（袖を）しぼるほどである。（東宮は）御琵琶を取り寄せなさって、搔き合わせるくらいの、かすかな音色（のご演奏）である。信有は感興を抑えられず、時節柄にふさわしい朗詠や今様を次々に歌い、風情も深い。頼成は笛を取り出して吹く。顕範は笙を持っておらず残念がるが、どうしようもない。（だから）時々唱歌をし、口笛を吹く。［中略］

　今夜の次第は、（趣深くて）かえって何とも書き留めがたい。悪くはない（普通の）ことはことさら筆に表すこともありますが、これは言葉も心も及びもつかないので、昔の紫式部（のような達者）でなくては、凡人の心では表しきれないだろうよ。ただこっそり隠して心に言い聞かせて、将来に思い出すことにしようよ。夜が明けてから退出した。

　（以下、十二日の記事）十三日の、夜明け前には出発しましょうと思って、一方では昨夜の東宮御所での次第についても、もう一度参上してお礼を申し上げようと思って、夕方に（東宮御所に）参上したところ、鎌倉から人が上京して、住み慣れた故郷が、（すっかり焼けて）虚しい空に上る煙となってしまったことを告げる。おおよそ焼け残る家が少ないくらいに焼けていますという旨を申すので、下向してもどこにどうやって（暮らせばよいのか）と分別のつけようもないから、明日の朝（の出発）は延期になった。まず誰かを下向させて、しばらくの間でも過ごせる所を探しますということで、明後日まで延期になった。